カンボジアワークキャンプ

今回、市役所のご助力を得て行かせて頂いたカンボジアでは今まで知らなかった多くのことを見ることができ、或いは、体験することができた。

8月29日、朝の便でベトナム、ホーチミン空港に発った。ベトナムの空港は意外と整備されていて、町並みも途上国とは思えないようなところもあった。すぐ便を乗り継いで、カンボジアのプノンペンへ。二年前にできた空港で、きれいだったが、何より、狭かった。着くと、現地NGOの学生が迎えてくれた、非常に英語が上手でびっくりした。日本人のメンバーとも合流し、バンでホテルへ向かったが、道に信号がほとんどないことや、バイクに三人、四人で乗っていること、ガソリンスタンド内を近道に使っていることなど、道路の状況だけでも驚くことが多かった。ホテルでは各々の自己紹介などをして初日が終わった。

二日目はGDIという現地NGOの学校へ行った。ここは350人ほどの日本でいう高校生から大学生にあたる年齢の生徒が校内で共同生活をし、英語と道徳教育の勉強を通して、就職先を決めることが目的であると説明があった。随分、大掛かりなNGOで、学校もしっかりつくられていた。英語の授業を見学したが、熟語や構文など、量は少ないが、生徒にそれを用いた会話をさせるなど、非常に実用的な授業だったと思う。先生は卒業生の方だというが、とても若く、楽しく授業を行う点など、とても好印象を受けた。授業後、私が日本語の授業をさせていたが、生徒がとても熱心であったことや、英語を話すのにとても積極的であったことに感心した。午後は生徒とゲームをしたり踊ったりして交流した。先生たちとサッカーをした時はぼこぼこのグラウンドと手作りの小さなゴールの中で白熱した試合をすることができた。

三日目はプノンペン大学へ。大学は教室や食堂などは整備されていたが、トイレや洗面所などは不衛生だった。ここでも、英語を生徒の大半が話し、将来についてなどの明確な視点をもっていることに驚いた。私も微弱ながら、開発経済学を専攻する学生として、途上国の認識を話し、それは本当にそうなのかと尋ねたが、その通りだが、解決するのは非常に難しいのだという答えを頂いた。何人かの生徒はその後の我々の活動に同行し協力してくれるとのことで、とても仲良くなった。

四日目は市内を視察した。トゥルースレン刑務所ではポルポト政権下での惨劇を学ぶことができた。その中での拷問などは大戦期の日本軍のそれを真似たものであったという。こんなところに日本人が関与していたなどとは思いもよらなかった。アンコール美術には、不思議な感覚を覚えた。王宮はとても煌びやかであったがそのまわりには多くの物乞いがいて複雑な気分になった。市内の病院の不衛生さには驚いた。アメリカ人の院長は彼が数年前に来たときはさらに酷かったという。集中治療室にまで汚物が散乱していたと聞いた時には衝撃を受けた。

五日目はマザー・テレサのミッショナリーオブチャリティー修道院へ。シスターの話で

は、献身が喜びであるという点に感銘を受けた。子供達と遊んだが、どの子供達もこちらから積極的に話かければ心を開いてくれ、明るい子達だなと思った。楽しい時間がすごせた。とても、全員ＨＩＶに感染している子だとは思えなかった。この子らが二十歳前後で亡くなってしまうと考えるとやりきれない心持ちがした。修道院内の掃除や草むしりなどを手伝わせてもらったあと、ＡＩＤＳの末期患者のところへ行って、話をしたり、歌をうたったりした。この時の気分はとても表しようのないものだった。

六日目からはプノンペンを離れ、キロリム国立公園へ。現地ＮＧＯと合流し、村へ。途中、カンボジアに３つしかない滝のうちの一つがあった。素晴らしい場所だった。ここでは二日間、町興しを手伝った。牛の通る道や橋、トイレなどを作った。村の家族の家にホームステイしたが、そこにはバッテリーにつないであるテレビがあって、多くの子供たちが集まっていた。村の暮らしの話、学校の話、日本の話など多くを話した。その家のお父さんはとても優しく、私にとてもよくしてくれた。村での生活は不便こそ多かったものの、忘れられない思い出となった。

八日目はシアヌークビルというビーチに行って遊んだ。とても綺麗な場所だった。ただ、マーケットなどは治安が相当悪かった。この日の夜がカンボジアの学生と話す最後の機会だったので、夜通し、カンボジアの今後はどうなっていくかについて語った。

九日目はプノンペンに戻り、ホテルでいろいろ反省会などをして、帰国の仕度をした。短い滞在ではあったが、多くのことが思い起こされた。
その夜、飛行機に乗り、ホーチミンを経て、翌日帰国した。

今回のワークキャンプでは支援という形で現地へ行ったが、こちらが何か与えるというより、多くのものを与えて頂いたという感想を持った。カンボジアの自然は素晴らしかったし、現地の人々の勉強熱心な姿勢には刺激を受けた。また、遊んでいる姿などはとても楽しそうで、貧困の国の人であるというネガティブなイメージは払拭された。特に子供の笑顔はとても印象的だった。

しかし、やはり、都市のインフォーマルセクターや、地方農村などには厳しい貧困が蔓延していて、これは実際に見ることによって、うまく表現できないが、非常に勉強になった。

今後も今回の経験を踏まえて、どのようにアジアの貧困を考えていきたいと強く感じている。